

心理学専攻の専門教育における図書館データベースの活用

文学部心理学専攻教授 浅野俊夫



はじめに 2005年度から文学部は人文社会学一学科に統合され新たに図書館情報学専攻と心理学専攻が増設された。一年生の秋学期末に専攻への

配属が決まることになっていたのですが、昨年度、心理学専攻が提供する専門科目は春学期の入門講義(心理学)と秋学期の入門演習(心理学)だけであった。この科目は心理学概論に位置づけられているので、三分冊の教科書のうち二冊を指定して、毎週1章ずつ進み、毎回内容の要約と感想を提出させるという敢えて厳しい授業方法をとった。

1章が40頁ぐらいあるので予習をしてこなかったら授業をきいてもよくわからないけど、一度読んできて解説をきくと心理学の体系がなんとなく分かってきて、関心を深める者と関心を失う者との違いがはっきり分かれてくるようである。とにかく、ゴールデンウィークを過ぎたころから、電車の中や図書館で水色や緑色の心理学の教科書を読む学生が増えてくるようになった。まだ専攻が決まっていない文学部一年生にとって図書館は重要な自習場所である。

また、このように敢えて厳しい学修態度を要求したことにはもう一つの理由がある。二年生になって心理学専攻に入るともっと過酷な「心理学基礎実験」という月曜日の午前中2コマぶっ通しの実験実習があり、その実験レポートを論文形式で翌週までに提出しなければならず、どの大学でも心理学科・心理学専攻の学生にとって最大の難関である。しかし、それを乗り越えないと卒業もできないし、認定心理士の資格申請もできないので、アルバイトや部活を調整しながらどうにかクリアしていかなければならず、そのた

めにも、一年生のうちから厳しい学修態度を身につけさせようという親心である。

心理学専攻生の教育はじまる 3月末の成績発表を見てから学生たちは自分の志望する専攻を最終的に決める。心理学専攻の志望者は36名で、定員を若干オーバーしていたが実験設備の許容量以内であったので全員受け入れることができた。心理学専攻第一期生36名の誕生である。この二年生になると、先に紹介した心理学基礎実験の他に「心理学研究法」という専攻必修科目もはじまる。この「心理学研究法」(岡田担当)では、アメリカ心理学会(APA)が制作する、世界二四カ国以上、1900誌にのぼる心理学に関する研究雑誌の記事、書籍、学位論文などの英文要約を収録した「PsycINFO」データベースの使い方を教えることになっていた。このデータベースはすべて英文であるが、我が国においても心理学教育の必須アイテムといわれており、心理学専攻設置が決まったときから図書館では二年生が出るまでには何とかしようご配慮いただいた結果、豊橋校舎内のネットワーク内ならどのパソコンからでもアクセスできるようになり、無事に春学期の授業を終えることができた。

Psychological AbstractからPsycINFOへ 筆者が心理学専攻三年生で卒論のテーマを探していた1964年頃は、図書館で朝から晩まで分厚い大量の「Psychological Abstract」という雑誌を調べてはその要約を読んでメモをとることに明け暮れていた。この雑誌は先述したPsycINFOの前身であり、1840年代から発表された心理学関連の論文や書籍の書誌情報や要約を、主題索引や著者索引で検索することができるので、関心を持ったテーマ関連の論文を調べ要約を読んで、大事な文献のリストを作り、指導教員に見てもらっ

てその中から特に重要なものを抜き出し、その書籍や雑誌を図書館で探して本文を読みメモをとるといふことの繰り返しであった。富士ゼロックスと英国ランク社が合弁で複写機製造会社を作ったのが1962年であるから、普通紙コピー機はまだ普及しておらず、学生は現物を読んでメモをとるしか方法がなかった。

ところがPsycINFOデータベースが使える現代の学生は、学内のパソコンならどこからでもこのデータベースにアクセスできる。しかも愛知大学図書館では、このPsycINFOを、カリフォルニア大学10キャンパスのCalifornia Digital Libraryと同じCSA (Cambridge Scientific Abstract) という、異なった複数のデータベースを同じ簡単な検索手続きでしかも自国語の指示で進めることができるシステムを採用しているため、網羅的な検索がきわめて簡単にできる。これまでPsycINFO以外のデータベース（とくに医学系・生物系のデータベース）にも関心を持つように教育しても、データベースによって検索式や手続きが違うのがネックになっていたが、このような共通検索ツールのおかげでこれから分野を超えた交流が促進されるであろう。なお、CSAには日本語の音声で画面操作を教えてくれるチュートリアルまで用意されている。

サイテーションindex付き PsycINFO ネットワークを通じてパソコンでアクセスするデータベースは様々な書誌項目で検索でき、検索結果をメールで送信したり、自分のパソコンに保存したりできるだけでなく、その書式も論文原稿の引用文献欄ですぐ使えるように指定することもできる。また、電子ジャーナルのように本文も電子化されている場合はそのことが表示されるのでフルテキストがすぐに入手できる場合もある。

さらに、その論文の要約の他に、その論文の引用文献リストの部分も表示され、個々の引用文献が他の人の論文に引用された回数（サイテーションindexという）が付記されている。検索によって得られた文献リスト

にはすべて引用回数が付記されているので、リストのうちどの論文が重要かすぐに分かるし、その論文の要約を表示すると、その論文が引用した文献の引用回数も表示されるので、あるテーマの研究に影響のある重要な文献はどれか、指導教員より遙かに信頼性の高い情報を提供してくれる。

国内データベースの活用 日本の学部生が授業のレポートを書いたり、卒論のテーマを決めたりするには、本来、日本語データベースが整備されるべきであるが、国立情報学研究所と大学図書館の連携によって、急速に整備が進んでいる。本学図書館のホームページで国内データベースを開くと、新聞記事や経済データなど様々なデータベースが提供されている。心理学専攻としては、その中でも特に「論文情報ナビゲータ (CiNii)」の利用を促進していきたい。歴史が浅いのでPsycINFOには遠く及ばずサイテーションindexも未装備であるが、学会や研究機関の機関紙、紀要、ニュースレター、大会論文集などが次々と電子化され書誌情報だけでなくフルテキストの提供も急速に増えている。

実は、この記事を書くためにCiNiiで自分の名前の検索をしたら、「造園雑誌」という見知らぬ雑誌の記事が出てきた。フルテキスト提供なので中身を読んでみると同姓同名の他人ではなく自分が1981年に日本造園学会で公園の設計における行動分析の重要性を講演したときの内容が、機関紙に掲載され、その機関紙が国立情報学研究所の電子図書館に登録されたために、最近になって検索で読めるようになったというわけである。おそらく機関紙印刷時に目にしたはずであるが、まったく忘れていた。データベースの威力である。

最近、インターネットの検索だけでレポートを書く傾向があるが、インターネットの情報は玉石混淆である。せめてCiNiiを検索する習慣を身に付けてもらいたい。CiNiiで学位論文の検索や、サイテーションindexの装備が実現する日も近いことを願っている。